

黙示録18章「大バビロンの崩壊」

1A 大バビロンへの裁き 1-8

1B 天の栄光 1-3

2B 行ないへの報い 4-8

1C 脱出 4-5

2C 苦しみと悲しみ 6-8

2A 世の悲しみ 9-20

1B 損害を受ける世 9-20

1C 地の王たち 9-10

2C 地上の商人たち 11-16

3C 船舶の人たち 17-19

4C 天の喜び 20

2B 沈む大いなる都 21-24

本文

黙示録 18 章を見ていきます。私たちは 17 章から、大淫婦と呼ばれる大バビロンの幻を読み始めました。それは、地上の王たちとの「不品行」という言葉があるように、本来、主なる神のみに自分の魂を任せ、この方に従い、仕えるべきなのに、他の神々に追従する偽りの宗教のことを話しています。世の制度に組み込まれた宗教です。あるいは宗教が、権力や富を得るための手段になっていると言えます。これが、「秘儀」であると書かれていました。秘儀、あるいは奥義は、過去には隠されていたが、今は明らかにされているものです。人類の歴史の中で、バビロンという存在は、実にエデンの園から始まっており、そのサタンの墮落と策略が始まりました。バベルの塔において明らかになり、けれども、ネブカデネザルによる新バビロニア帝国がエルサレムを破壊して、ユダの民を捕え移すことによって歴史の中に出てきました。そしてローマ帝国が、エルサレムを再び破壊し、ユダヤ人が奴隷として捕え移され、世界に散っていったというところにも現れたのです。しかし、終わりの日にはそれが完全な形で現れます。かつてのローマ帝国が復興するような形で、十の連合体に分れ、けれども反キリストの台頭でそれはやがて、彼を神とする宗教、世界政府でまとまります。その時、バビロンという宗教に利用価値がなくなり、それで他の王たちと共同でバビロンを倒すのです。

18 章においては、その女の不品行の部分ではなく、巨大な富のほうに焦点が当てられます。巨大な富、誰にも支配されず、説明責任のない富が蓄積されるシステムについて見ていきます。17 章が宗教的バビロンと呼ぶならば、18 章は商業的バビロンと呼んでよいでしょう。

ところで、私たちは 16 章 19 節で大患難の終わりに、ハルマゲドンの戦いの後にバビロンが崩壊する姿を見ました。「また、あの大きな都は三つに裂かれ、諸国の民の町々は倒れた。そして、大バビロンは、神の前に覚えられて、神の激しい怒りのぶどう酒の杯を与えられた。」この大地震によって、都そのものが破壊されます。けれども、反キリストが神となる世界政府は、第七十週目、ダニエルの七年間の半ばに始まります。その時に反キリストは宗教バビロンを滅ぼしています。ですから、同じバビロンでも、おそらくは 17 章は宗教的側面が倒れることを意味して、18 章は経済的要素、商業的な側面のバビロンが崩壊するのではないかと思います。バビロンが商業としては、そのまま残っており、しかし宗教についてはエルサレムで反キリストが神として神殿の中であがめられているという体制です。

新約聖書において、コスモスと言うギリシヤ語が「世」と訳されています。これは、物理的な世界、世も表しますが、神に反抗する人間の制度や体制も表します。ヨハネ第一 2 章に、そのことがかかれています。「2:15-17 世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行なう者は、いつまでもながらえます。」ここにあるように、世はキリスト者に敵対しています。世を愛せば神の愛はなく、神の愛があれば世への愛はありません。けれども、終わりの日に世とその欲を主は滅ぼされます。そして神の御心を行なう者たちのみが、いつまでも永らえます。ですから、17 章において世の制度に組み込まれた宗教が過ぎ去ること、18 章においては富についての制度が過ぎ去ります。そして 19 章では、政治的権力、反キリストと諸国の軍隊がキリストご自身によって滅ぶのです。

私たちは、生ける神とキリストによって結ばれる時に、その妨げとなるものは何かを上げる時に、政治的なものはほとんどないでしょう。キリストを信じたから、国家権力によって迫害を受けるということは、戦時中ではあったものの今はありません。けれども世界には、そのような境遇にあるキリスト者は一億人とも言われています。けれども、宗教的理由は大きいでしょう。自分は仏教なのに、または神道なのに、キリスト教を信じれば社会的に孤立してしまう、家族を裏切ることになるという圧迫は受けます。けれども、最も大きな理由は経済でしょう。自分は特に困ったことはない、ということ。自分に頼れるという、悪い意味での自信を持っているので、神を信じる必要はないと考えます。

富そのもの、金銭そのものが悪であるということではありません。富は、私たちが神を愛しているのか、それとも自分自身を愛しているかが如実に現れるものと言えましょう。神は、それゆえ金銭を愛することが諸悪の源であることを話しています。「1テモテ 6:9-10 金持ちになりたいがる人たちは、誘惑とわなと、また人を滅びと破滅に投げ入れる、愚かで、有害な多くの欲とに陥ります。金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。ある人たちは、金を追い求めたために、

信仰から迷い出て、非常な苦痛をもって自分を刺し通しました。」これから、その金銭への愛を産み出す世の制度を見ていきます。

1A 大バビロンへの裁き 1-8

1B 天の栄光 1-3

1 この後、私は、もうひとりの御使いが、大きな権威を帯びて、天から下って来るのを見た。地はその栄光のために明るくなった。

18章では、語っている存在が三つ出てきます。1-3節では、ここの大きな権威を持っている御使いです。そして、4-20節が天からの声です。21-24節までが、また別の御使いです。その初めの1-3節ですが、御使いが大きな権威を帯びて、栄光までを輝かせてやってきました。つまり、神の権威と栄光を現しているのです。その力と光によって、世にあるバビロンの姿が映し出されています。そこは、汚れた霊どもの巣窟であり、不品行と富で乱れていた世界でした。聖徒がいるということは、同じようなことが起こります。「実を結ばない暗やみのわざに仲間入りしないで、むしろ、それを明るみに出しなさい。(エペソ 5:11)」

2 彼は力強い声で叫んで言った。「倒れた。大バビロンが倒れた。そして、悪霊の住まい、あらゆる汚れた霊どもの巣窟、あらゆる汚れた、憎むべき鳥どもの巣窟となった。

御使いは、「倒れた。」と二度、叫んでいます。これは、古代のバビロン帝国が倒壊する預言をしたイザヤの言葉から来ているものです。「21:9 ああ、今、戦車や兵士、二列に並んだ騎兵がやって来ます。彼らは互いに言っています。『倒れた。バビロンは倒れた。その神々のすべての刻んだ像も地に打ち砕かれた。』と。」これは、メディア・ペルシヤ連合軍がバビロンの町に侵入した時の幻です。ダニエル書 5章に、その最後の晩にベルシャツアルが何をしていたかが書かれています。エルサレムの神の宮から持ってきた器を宴会の場に持ってこさせて、神々の名を賛美しました。しかし、人の手の指が壁に文字を書きました。ダニエルがそれを解き明かし、バビロンが倒れることを告げました。ベルシャツアルは、彼に褒美を与えましたが、その夜に彼は殺されました(5:30)。このように、突如として破壊が来たのです。

バビロンは、とてつもなく栄華に富んでいた都であり、かつ要塞がとてつもなく強いものでした。ユーフラテス川が真ん中を流れていて、水には困りません。地下に深く埋め込まれている厚い城壁があり、侵入はほぼ不可能に思われました。備蓄があったので、20年は持つといわれていました。ベルシャツアルは、バビロンの国の町々がメディアとペルシヤに攻め込まれていることを知っていたながら、バビロンの都は沈まないと思っていたのです。しかし、ペルシヤの王クロスは、ユーフラテス川から堀を作って、水を迂回させ、水位を低くして、水門の下からはいり込んでいったのです。それから、川の両側は壁があり、青銅の門からしか入れませんでした。その護衛たちも酒

に酔っていて、無防備であり、王宮の中に難なく入ることができました。これが、「倒れた、倒れた」と叫んでいる背景にあります。つまり、滅びが近づいているのに、「自分だけは大丈夫だ」と思い込んでいる奢りに対して、裁きが宣言されているのです。

そしてここが、「悪霊の住まい、あらゆる汚れた霊どもの巣くつ、あらゆる汚れた、憎むべき鳥どもの巣くつとなった」とあります。バビロンの崩壊については、イザヤ書 13-14 章とエレミヤ書 50-51 章に詳しく幻があります。その中で、バビロンは永遠の廃墟となるとあります。「13:21-22 そこには荒野の獣が伏し、その家々にはみみずくが満ち、そこにはだちょうが住み、野やぎがそこにとびはねる。山犬は、そのとりで、ジャッカルは、豪華な宮殿で、ほえかわす。その時の来るのは近く、その日はもう延ばされない。」このように廃墟となっていますが、そこに同時に、悪霊どもが住まいとしているということです。ゼカリヤ書 5 章にも、バビロンの悪霊、不正な富、そして霊的不品行が幻となって表れています。

イエス様が再臨される時に、この都は三つに分かれることが黙示録 16 章に書かれていますが、その中の一部に、人類の初めの時からいて、終わりの日まで、黙示録でもユーフラテスのところにある悪霊どもの存在を上げていますが、そこまでの悪霊どもがそこに徘徊するところとなります。地上における神の国、千年王国において、バビロン、またエドムだけは永遠に廃墟とされています。ですから、神の栄光に富むエルサレムと、永遠の滅びを受けるバビロンが鮮やかに対比されています。

3 それは、すべての国々の民が、彼女の不品行に対する激しい御怒りのぶどう酒を飲み、地上の王たちは、彼女と不品行を行ない、地上の商人たちは、彼女の極度の好色によって富を得たからである。」

これは、17 章においても宣言されていたことですが、付け足されているのは、「地上の商人たちは、彼女の極度の好色によって富を得た」というところです。バビロンの商業主義に対する裁きが、この章においては際立っています。

2B 行ないへの報い 4-8

1C 脱出 4-5

4 それから、私は、天からのもう一つの声がこう言うのを聞いた。「わが民よ。この女から離れなさい。その罪にあずからないため、また、その災害を受けないためです。

ここの、「わが民よ」とは誰のことでしょうか？ 患難期の終わりにいるユダヤ人の残りの民のことでしょう。また異邦人で忠実な異邦人たちでしょうか、けれどもこの時期には非常に少ないでしょう。そこにいる神の民が、バビロンを離れるように命じられているのです。当時のバビロンにおいて、

その都がペルシヤの前に倒れても、ユダヤ人がエルサレムに帰還する人々は五万人程度でした。けれども、多くはそのまま居残ったのです。それはそこで定住し、奴隷の身でありながら栄えていたからです。けれども、その安定した生活はすぐに過ぎ去るのだということを神は警告しています。「エレミヤ 51:6 バビロンの中から逃げ、それぞれ自分のいのちを救え。バビロンの咎のために絶ち滅ぼされるな。これこそ、主の復讐の時、報いを主が返される。」ゼカリヤ書 2 章にも、バビロンから逃げなさいという命令が書かれています。

5 なぜなら、彼女の罪は積み重なって天にまで届き、神は彼女の不正を覚えておられるからです。

「罪は積み重なって天にまで届き」という表現ですが、主が罪に対して忍耐しておられたけれども、今や怒りを示す時だということです。主が、アブラハムに語られたことを思い出してください。「創世 15:16 そして、四代目の者たちが、ここに戻って来る。それはエモリ人の咎が、そのときまでに満ちることはないからである。」エモリ人またカナン人は、その地で主が忌み嫌うべきことを行っていました。その裁きは、アブラハムから四代目の者たちが戻って来て、そして彼らを根絶やしにしなければと命じられる時までは、満ちることはないと言われています。主が忍耐しておられたからです。しかし主は、「彼女の不正を覚えておられる」とあります。主は悪を容認される方ではありません。その義のゆえに、聖なるご性質のゆえに、必ず不正については覚えておられます。

2C 苦しみと悲しみ 6-8

6 あなたがたは、彼女が支払ったものをそのまま彼女に返し、彼女の行ないに応じて二倍にして戻しなさい。彼女が混ぜ合わせた杯の中には、彼女のために二倍の量を混ぜ合わせなさい。

神は、報復、報いの原理をここで語っておられます。自分の蒔いたものは、刈り取るという原理です。バビロンについては、イザヤ書 50 章 29 節に書いてありますし、詩篇 137 篇 8 節にもあります。「バビロンの娘よ。荒れ果てた者よ。おまえの私たちへの仕打ちを、おまえに仕返す人は、なんと幸いなことよ。」この原則は新約にもあり、例えばテモテ第二には、パウロがアレキサンダーという男にこの原則を当てはめています。「2テモテ 4:14 銅細工人のアレキサンデルが私をひどく苦しめました。そのしわざに応じて主が彼に報いられます。」

二倍にして戻すとありますが、これは出エジプト記 22 章 4 節から来ている律法です。物を盗んだ者がいる時に、彼は二倍にして返済しなければならないことが書かれています。なぜなら、物理的に盗んだ物を返してもらうのは当然のことです。けれども、物を盗むということは、その所有者の尊厳や権利、主の与えられたものに害を及ぼすことです。それゆえ、その精神的損傷を補うために、その物品や所有物を返すだけでなく、同じものをさらに加えて返します。

18:7 彼女が自分を誇り、好色にふけったと同じだけの苦しみと悲しみとを、彼女に与えなさい。彼

女は心の中で『私は女王の座に着いている者であり、やもめではないから、悲しみを知らない。』と言うからです。

17章においては、主がバビロンを裁かれた理由として、不品行を挙げておられました。18章では、不品行だけでなくその高ぶりに対しても裁きを下されます。「やもめではないから、悲しみを知らない」というところに、その高ぶりが現れています。「イザヤ 47:8 だから今、これを聞け。楽しみにふけり、安心して住んでいる女。心の中で、『私だけは特別だ。私はやもめにはならないし、子を失うことも知らなくて済もう。』と言う者よ。」私だけは特別だ、これは直訳すると、「わたしだけで、他にはいない」という、主ご自身がご自分のことを言い表す時に使われた言い回しです。それを言っているのですから、私は神だと言っているに等しいです。

このように、世の富に拠り頼むことがいかに霊的には危険なことかを思わされます。富そのものが悪ではなく、富にある力を信じて、心が高ぶるからです。世の終わりに富む者が受ける裁きについて、ヤコブが話しています。「ヤコブ 5:1-3 聞きなさい。金持ちたち。あなたがたの上に迫って来る悲慘を思って泣き叫びなさい。あなたがたの富は腐っており、あなたがたの着物は虫に食われており、あなたがたの金銀にはさびが来て、そのさびが、あなたがたを責める証言となり、あなたがたの肉を火のように食い尽くします。あなたがたは、終わりの日に財宝をたくわえました。」

8 それゆえ一日のうちに、さまざまな災害、すなわち死病、悲しみ、飢えが彼女を襲い、彼女は火で焼き尽くされます。彼女をさばく神である主は力の強い方だからです。

「一日のうちに」であります。イザヤなどが預言した通りです。富によって高ぶっている時の破壊は、このように突如としたものです。ベルシャツアルがそうでしたが、金持ちの喩えは有名ですね。「ルカ 12:20 しかし神は彼に言われた。『愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。そうしたら、おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。』」

2A 世の悲しみ 9-20

そして次、9節から19節は、世の悲しみが書かれています。バビロンが倒れたことによって、三種の人々が嘆き悲しみます。地上の王たち、次に地上の商人たち、それから船舶で働く人々です。自分たちの収益が無くなることに対して、嘆き悲しんでいます。

1B 損害を受ける世 9-20

1C 地の王たち 9-10

9 彼女と不品行を行ない、好色にふけた地上の王たちは、彼女が火で焼かれる煙を見ると、彼女のことで泣き、悲しみます。10 彼らは、彼女の苦しみを恐れたために、遠く離れて立っていて、こう言います。『わざわいが来た。わざわいが来た。大きな都よ。力強い都、バビロンよ。あなたの

さばきは、一瞬のうちに来た。』

地上の王たちです。遠くで離れて立っているのは、非常に高熱の火によって燃えているからでしょう。本来、政治家は国のため、民のために働く公僕です。けれども、しばしば財界との関係によって、その権力を自分の私腹を肥やすために使います。彼らは、「力強い都、バビロンよ。」と叫んでいます。力強い方は知らなかったようです。

2C 地上の商人たち 11-16

11 また、地上の商人たちは彼女のことで泣き悲しみます。もはや彼らの商品を買う者がだれもないからです。12 商品とは、金、銀、宝石、真珠、麻布、紫布、絹、緋布、香木、さまざまな象牙細工、高価な木や銅や鉄や大理石で造ったあらゆる種類の器具、13 また、肉桂、香料、香、香油、乳香、ぶどう酒、オリーブ油、麦粉、麦、牛、羊、それに馬、車、奴隷、また人のいのちです。

商人たちは、バビロンによる貿易によって収益を得ていたので、彼らが最も大きな損害を受けています。世の悲しみは、ここに「彼らの商品を買う者がだれもない」とあるように、罪のために悲しむのではなく、収益を失ったからです。多くの人が、自分が損をして悲しみますが、罪のゆえに悔恨して、へりくだる人は少ないです。パウロはこう説明しました。「2コリント 7:10 神のみこころに添った悲しみは、悔いのない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします。」世の悲しみは死をもたらしますが、悔い改めを生じさせる悲しみは救いをもたらします。

そして、ここにある商品は贅沢品です。エゼキエル書 27 章にて、ツロに対する神の裁きの宣言において、出て来るような品々です。彼らのタルシシュの船が地中海の真ん中で沈みます。そして、地の王たち、商人たち、住民たちが非常に恐れることが書かれています。この商品の中に、「奴隷、また人のいのち」とあります。直訳は「肉体」と書いてあります。つまり、彼らは奴隷にされているだけでなく、商品として肉体が売られていたのです。当時のローマは、コロセウムという競技場で盛大なエンターテインメントがありました。戦闘員がどちらかが死ぬまで戦います。生きている者たちが、ライオンによって食い殺されていくのを見物します。その中に、キリスト者がいました。彼らは生きたまま木にかけられ火あぶりにされ、ライオンに食い殺されますが、それを観衆が楽しんで見ていたのです。現代においては、奴隷はいまも続き、誘拐、臓器売買、膨大なポルノ産業、そこで性奴隷になっている人たちがいます。

14 また、あなたの心の望みである熟したくだものは、あなたから遠ざかってしまい、あらゆるはでな物、はなやかな物は消えうせて、もはや、決してそれらの物を見いだすことができません。15 これらの物を商って彼女から富を得ていた商人たちは、彼女の苦しみを恐れたために、遠く離れて立っていて、泣き悲しんで、16 言います。『わざわいが来た。わざわいが来た。麻布、紫布、緋布を着て、金、宝石、真珠を飾りにしていた大きな都よ。

「くだもの」という表現が興味深いです。「ヤコブ 1:15 欲がはらむと罪を生み、罪が熟すると死を生みます。」しかし主は、その欲望が熟するままにずっとしておかれるのではありません。そして、地上の王たちと同じように、遠く離れて泣き悲しんでいます。その贅沢な姿が無くなってしまったことに対する悲しみです。

3C 船舶の人たち 17-19

17 あれほどの富が、一瞬のうちに荒れすたれてしまった。』また、すべての船長、すべての船客、水夫、海で働く者たちも、遠く離れて立っていて、18 彼女が焼かれる煙を見て、叫んで言いました。『このすばらしい都のような所がほかにあろうか。』19 それから、彼らは、頭にちりをかぶって、泣き悲しみ、叫んで言いました。『わざわいが来た。わざわいが来た。大きな都よ。海に舟を持つ者はみな、この都のおごりによって富を得ていたのに、それが一瞬のうちに荒れすたれるとは。』

船舶業は、当然、大きな損害を受けます。けれども、四つ目のグループは喜びにあふれます。これまでは地上の者たち、海にいる者たちが悲しんでいましたが、次は天にいる者たちです。

4C 天の喜び 20

20 おお、天よ、聖徒たちよ、使徒たちよ、預言者たちよ。この都のことで喜びなさい。神は、あなたがたのために、この都にさばきを宣告されたからです。」

あまりにも対照的です。同じバビロンの崩壊を、一方は悲しみ、もう一方は喜んでいるのです。世の愛は神の愛とは相いれないことが、ここによく表れています。そしてこの声を上げているのは、「天にいる聖徒たち、使徒たち、預言者たち」です。彼らは、患難の時に殉教した聖徒たちはいるでしょうが、使徒たち、預言者たちというのは新約聖書において、教会を建て上げる礎をキリストにあって据えた人々として出て来ます(エペソ 2 章)。彼らもまた、霊的にバビロンの制度、世の制度の中で、そのほとんどが殉教しています。ここで、彼らの信仰について、神が正しい裁きを行なわれたのです。もし私たちが、世に対する未練があれば、それが過ぎ去るのは悲しいでしょう。けれども、天に対する希望があれば、むしろ世が過ぎ去るのは喜びでしょう。

2B 沈む大いなる都 21-24

21 また、ひとりの強い御使いが、大きい、ひき臼のような石を取り上げ、海に投げ入れて言った。「大きな都バビロンは、このように激しく打ち倒されて、もはやなくなって消えうせてしまう。」

三つ目に、声かけをした存在です。別の力強い御使いです。彼は、大きな石を海に投げ入れていて、それが浮かんでこない、永遠に滅んでいる、沈んでいることを象徴して表しました。これはエレミヤが主から行ないなさいと命じられたものと同じです。「51:63-64 この書物を読み終わったなら、それに石を結びつけて、ユーフラテス川の中に投げ入れ、『このように、バビロンは沈み、浮か

び上がれない。わたしがもたらすわざわいのためだ。彼らは疲れ果てる。』と言いなさい。」もう再び浮上して、神を愛する者たちを苦しめることはないのだ、という保障であります。

22 立て琴をひく者、歌を歌う者、笛を吹く者、ラッパを鳴らす者の声は、もうおまえのうちに聞かれなくなる。あらゆる技術を持った職人たちも、もうおまえのうちに見られなくなる。ひき臼の音も、もうおまえのうちに聞かれなくなる。23 ともしびの光は、もうおまえのうちに輝かなくなる。花婿、花嫁の声も、もうおまえのうちに聞かれなくなる。なぜなら、おまえの商人たちは地上の力ある者どもで、すべての国々の民がおまえの魔術にだまされていたからだ。

これは、放漫な生活における喜び、楽しみがなくなることを言い表しています。これが、以前ではノアの時代で、洪水が来る前の状態でした。「マタイ 24:38 洪水前の日々は、ノアが箱舟にはいるその日まで、人々は、飲んだり、食べたり、めとったり、とついだりしていました。」

ところでこの、「魔術」という言葉は、麻薬によってもたらされる意味合いもあります。つまり、「幻覚」です。商業主義というのは、人々に幻覚を見せるようにさせます。人生、生活の現実の姿を見せないようにさせます。これらは、商人たちが作り出した幻想です。仮想現実には生きているようなもので、実質がないのです。その夢から覚めれば、何もないことに気づくようなものです。

24 また、預言者や聖徒たちの血、および地上で殺されたすべての人々の血が、この都の中に見いだされたからだ。」

ここが、世の豊かさの裏通りにある、信仰者の姿であります。先ほどのコロセウムの話です。ローマは極度に富を持ち、それで人々が退廃していました。その中でキリスト者は血を流していました。今も、キリスト者が迫害を受けている、殉教しているという話はニュースに流れません。ですから、世から見捨てられているのです。けれども、主は見捨てておられない、彼らを顧みておられます。私たちは、この目を留めるべきですね。主が見てくださっています。そして、必ず報いを与えてくださいます。

今回は、その天における大いなる喜びの幻から始まります。